
欠けている

白い黒猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

欠けている

【Nコード】

N6327P

【作者名】

白い黒猫

【あらすじ】

恋人に裏切られ、大喧嘩のあげく大怪我を負い病院に運びこまれた鈴木薫。入院している薫に何故か優しく話しかけてくる女性患者がいる。何故その女性は自分のような人間なんか、そんなに親しみをもった態度で接してくるのか？ 薫は訝しながらも、退屈な入院生活を紛らす為にその女性と交流をしていくことになるが……。どこか欠けている女達の、チョット歪んだ友情を描いた物語。一応15Rとありますが、エロとかグロの要素はありません。傷害事件とか、女性の悩みといった内容を含むのでいれさせて頂きました。

砕けた心と身体

> i 1 6 2 2 0 — 1 6 0 3 <

秋特有のポツカリと抜けた真っ青な空が、窓の外に広がっている。外から燦々と陽の光が降り注ぐ。暖かさと明るさをもったそんな太陽の日差しですら、私の心を晴らす事はない。

私は病院内の垢抜けずパツとしないレストランで、大きく溜息をつく。右手で右のこめかみを押さえるようにしているのは、包帯が巻かれた頭部の傷が痛むというより、右目の付近に広がった青胆を隠すため。腫れと裂傷があるので、化粧で隠す事も出来やしない。

私は車椅子から真っ直ぐ前に伸びたギブスで固められた右足に視線をやる。この足にはボルトが何本が入っていると医者から説明があった。ボルトって工具のように、なんで人間の足を繋ぐのにも使われるのだろう？ しかもギブスの下の皮膚は、あり得ない色彩となっていて、本当に元の肌色へと戻ってくれるのか心配になっている。

昨日から松葉杖の練習を始めたけど、まだ鬱血が酷くそのせいで足が痛み、そう長くは足を下ろす事も出来ない。その為今は車椅子で院内を移動している。『最悪』の状態というのは、まさに今の私の為にある言葉だろう。

（ま、そもそも、私の人生で最低でなかった状況の方が少ないか）

親の望む子供でいようと努力し耐え続けた十代。期待に応えて医大にも入学する。大人の世界と自分がこれから歩む未来が見えてきたときに、何かが自分の中でキレた。もう限界だった。

両親に自分の本音をさらけ出し理解を求めたが無駄だった。父は

惘然とした顔で黙り込み、母は半狂乱になり、キチガイ扱い。耐えきれず家を飛び出し、そのまま連絡も出来ず断絶状態のまま。

大学も中退した私のような人間が向かう場所なんて限られている。夜の街で短いスカートを履き、楽しくお酒を勧め騒ぐホステスとしての生活。でも我慢して家にいるよりかは楽だった。それに同じ悩みを抱える仲間も出来る。そこでだけ、私は自由になれた。

しかし、一步外を出れば、すれ違う人は私を奇異な目で見てから、あざ笑うかのような顔をする。派手な化粧で歩くホステスの私なんて、一般の価値観から外れたマイノリティーというのを思い知らされた。

人生で唯一心の底から幸せを感じた瞬間はあった。そう瞬間というのが相応しいくらい短い期間だったけど……。人生で初めて彼氏が出来たのだ。身長百七十センチという長身で肩幅もある私を、彼は可愛いと言ってくれた。相手は一流商社勤め長身のイケメンで、正に理想の彼氏。人生で最初に付き合ったのがこんな素敵な男性。今までの苦悩に満ちた日々も一気に挽回するような出来事に私は舞い上がった。

生活の全てが楽しくなり。一生懸命仕事も頑張り、金を稼ぎ、自分も磨き、彼に尽くした。それが最悪に変わる事も知らずに……。

合い鍵を使い彼氏のマンションを訪れ、浮気相手との鉢合わせ。サプライズのつもりで、自分が驚くなんてベタな展開を誰が想像するのだろうか？ 頭に血が上った私は、思わず恋人に掴みかかったが、『お前のようなヤツ本気になるわけじゃないだろ』という彼からの嘲りの言葉に、自分の方が浮気相手だった事を理解する。また突然の事に思考がついていけず固まっていた女性の視線が、私達二人の会話聞き目が憐れむようなものに変わっていく事が、より私を痛めつけた。つまり対等に一人の男性を取り合う事すらありえない私と彼女。彼女より明かに劣っている自分をまざまざ見せつけられる。

散々貢がせるだけ貢がせて、もて弄ばれていたという事実には頭の中は真っ白だ。その後の事よく覚えていない、気が付いたら自分の身体が宙に浮いていて叩き付けられる激しい痛み。

後で聞いた話だと、私は彼ともみ合った結果ベランダから突き落とされたらしい。彼の本当の彼女が救急車を慌てて呼び今この病院にいる。彼の部屋が三階にあり、ベランダの下が植木だったので助かった。階が上だったら、あるいは植木が下になれば私は死んでいた。

全身打撲に、右足複雑骨折で済んだのは運が良かったと言われるが、この状況何処が良かったというのだろうか？

ホステス仲間を紹介してもらった弁護士を通して、示談で必死に済まそうとする彼と、民事やらなんやらと、色々な形で争っている所。

「今度はさ、アイツ薫ちゃんをストーカーに仕立てようとしていたみたい。でも携帯のメールがあるから結婚をちらつかせてお金請求していた証拠もあるんだから！ 大丈夫、慰謝料もタツプリぶんどってやるから」

「詐欺罪でも訴えられるんじゃない？ 結婚匂わせて、散々貢がせたのだから」

「しかも、アイツ、最低男だと婚約者にもバレて、破棄になって捨てられたみたいよ！ いい気味い。しかも会社にも傷害で揉めてるのバレて左遷で関連会社に飛ばされるとか」

見舞いに来てくれたホステス仲間の励ましの言葉も、私の気分を晴らすことはない。元彼が、傷害罪で有罪となろうが、裁判に勝つ

て慰謝料を貰ったとしても、今の私の状況が変わるわけでもなく、心の傷も身体も傷も癒えることはない。

私は明るく去っていくホステス仲間に手を振り見送った後も、このレストランでぼんやりとしていた。さてと、今からどうするか。午後三時チョット前。病気で体調が悪いわけでもなく、足は動かないものの他は元気な私のような入院患者にとつて病院は退屈以外なものでもない。しかも私がいるのは大部屋な為に、同じ部屋の人達の視線が煩わしい。

みんな私の方を見て一瞬驚いた顔をした後、蔑んだニヤゝとした顔を見せていく。

「お前もさ、女なんだから、もつと女らしくしろよ！ ほら あの入り口近くのお嬢ちゃんみたいにさ。あんなんだけど、荷物もいつも綺麗に整えているし、お前よりもよっぽど女らしいぞ！」

「お父さんつたらゝ！」

こんな感じで、お見舞いにきた家族らと、私の事をクスクスと笑っているのも聞こえてくるのだ。今は丁度お見舞い時間だからよけいに病室には帰りたくない。

仕方が無いので、私は珈琲のお代わりを注文する。本当は煙草も吸いたかったけれど、この病院は外の通りに面した所に喫煙室がある。そこまでこの車椅子を動かして行くのも面倒だし、またソコにいる人から奇異な目で見られるのも嫌だ。せめて化粧して素顔と痣を隠せるようになりたい。突然の入院のため身一つで運び込まれた私を、ホステス仲間に随分助けてもらった。今着ている服を始め細々とした入院中に必要なモノは全て彼女達からの差し入れ。今の私の状態だと可愛いフリルのついたＴシャツに、ピンクの女の子らしいガウンがますます浮いている。でも、可愛らしい格好していることで、私は自分という存在を保っていられるような気がした。

私は証拠のメールの吸い出しの為、一日ほど手元から離れていたスマートフォンを電源を入れ、色々弄くる。今更読んでも仕方が無いのに、元彼からもらったメールをついつい読み返してしまう。

『薫ちゃんからもらった時計。今つけているよ！　こうしているとずっと一緒にいるみたいだね』

『ゴメン、その日は仕事で逢えないんだ。俺も寂しい。来週逢ったときに薫の作った料理食べたいな』

そんな、上辺だけの愛を語ったメールを読み返していくと、なんか笑えてくる。私はスマートフォンを握り閉める。

「あの、良かったら……どうぞ」

遠慮がちな小さな声があった。私の目に、華奢で綺麗な手の上につたポケットティッシュが目に入る。私は、それを差し出されて、初めて自分が泣いていた事に気が付いた。

「ありがとう」

私は恥ずかしくて、つい小声でお礼をいい、そのティッシュを受け取る。隣を見ると、細身の綺麗な女性がコチラを見ている。その女性はフワッと柔らかい笑みを私に向けてくる。その顔を見て私の中にズキッと痛む。

「病院って、嫌になっちゃうわよね」

こんな、傷だらけで得体のしれない相手に、普通に話しかけてくる所からみても、苦労知らずで、真っ直ぐ育ってきたお嬢様なのだ

ろう。黒目がちの瞳が印象的な、髪の長い女性がコチラを氣遣うように見ている。やや儚げな雰囲気、細身の身体を優しい広がりをもせる黒のロングスカートに白いインナーにラベンダー色のカーディガンに身を包んでいる。その上品な出で立ちが嫌味な程似合っている。誰が見ても『素敵な良いお嬢さん』と言われるであろうタイプ。私と違って、男性がほつとかない。まさに男性が挙って結婚したいと望むのだろうな、こういった女性には。つまらない嫉妬である。彼女の左手を見ると、案の定プラチナの指輪が輝いている。私には眩しすぎる輝きをその指輪が放つ。

「まあね、アナタはお見舞い？」

普段だったら、無視しているような相手だと思うけど、私は、ついその話しかけに言葉を返していた。

似たような境遇のホステス仲間に囲まれた日常で忘れてた自分の立場。病院では社会において爪弾きモノだという事を嫌というほど感じる。人が一杯いるはずの病院で、疎外感と孤独に苛まれていた。それにあんな事件のあった後だから心も弱っていたので、つい人が恋しかったのかもしれない。

「いえ、患者。入院することになってどうしたものかと、思ってたところなの」

耳を触りながら、チョット顔をしかめて言う彼女に、私は何と言葉を返して良いのか悩む。

「あ、そうなんだ」

無難な言葉を選んでおいた。あまり重病には見えないけれど、ここは病院、あまり突っ込んだ事も聞けない。

「なので、一緒ね」

彼女はフフッと笑う。

何処が一緒なんだろう？　こんな最悪な状態の私と、私が欲しいものの全てもっているこの女性。私は曖昧な笑みを返す。

次の日の午前中、検査で二階の診療エリアに行くと、レストランにいたアノ女性の姿を見掛けた。優しそうな旦那様と思われる男性と笑いあっていた。コレから入院するというのに二人は幸せそうに笑っている。心身共にボロボロでこの病院に一人で運び込まれた私とはエライ違いである。私はその光景になんかムカツキながら、診察室へと向かった。

聞こえない音

病室の前提条件は治療を行い療養する場所。居住性が多少悪いのは仕方がないにしても、他者と自分を隔てるモノがこの薄いカーテンだけと言うのは心もとない。

私のいる病室は外科な事もあり、大変なのは怪我している患部のみ。それ以外は元気な事もあり、かなりけたたましい。中途半端に行動を抑制されている事もあり余計に騒ぎたいのかもしれない。そしてコチラにも興味ありげに干渉してくるところが堪らない。親愛をもって干渉してくるならいいけど、好奇心だけでやってきてセクハラじみた発言を平気で投げかけてくるのだ。なので、私は部屋にいるときはカーテンを閉め閉じこもり、イヤホンで音楽を聞き外の世界を遮断する。診察やりハビリのない自由な時間は病院のレストランで過ごしている。

ここなら、他人と心地よい距離感を保てる。

今日も車椅子を動かし、レストランに行くと、もうスツカリ顔馴染みになったウェイトレスさんが、入り口からはチョット見えづらい観葉植物の奥の席に案内してくれる。私は椅子を外してもらった部分に車椅子をつけ、一息いれる。ここなら観葉植物が右側を隠してくれるので少し落ち着ける。私は珈琲を頼み、車椅子の座席部分に入れておいた女性雑誌を取りだそうとしたが、手が滑り床に落としてしまう。

普段ならなんてことないことだけど、足がこும்不自由な状態だと、床にあるものを取るのが途轍もなく大変な事。私は溜息をつく。そして、ギブスの右足でバランスを取りながら体勢を落とそうとすると、手か伸びてその雑誌を誰かが拾ってくれた。

顔を上げると、先日このレストランで会ったあの女性だった。

柔らかく明るい笑顔をコチラに向けてきた。なんでこの女性は私を見て嬉しそうに笑うのだろうか？ 私は、お礼を言いながらその雑誌を受け取る。

上品で女の子らしいエトストスーツにシンプルなパーカーという入院患者ルックに身を包んでいる。腕にチューブが伸びて、隣に点滴スタンドを連れている。化粧をしてないせいだろうか？ 前見た時よりも顔色は良くないように見える。でもノーメイクでも可憐に見えるところがなんと羨ましい事なのだろうか。ノーメイク状態で女物の洋服を着ていなければ、長髪の男性になってしまう私とは大きな違いである。

「また。会えるなんて、奇遇ですね」

そう言って人懐っこい笑みを浮かべ、隣のテーブルにその女性は座る。

「まあね、この病院内だと此所くらいしか来る場所ないしね」

「それもそうね」

フフフと笑う。そしてその女性は鈴木香織と名乗った。その名前に私は苦笑するしかない。

「え、貴女、鈴木薫さんというの？ 凄い偶然ね！」

彼女はその、偶然を素直に楽しんでいるようだが、なんで読みが一字違うだけで、こんなにもこの二人は違うのだろうか。

華奢で可愛らしくて性格もよい、素敵な旦那様もいて幸せな『スズキカオリ』さんと、身長百七十センチでゴツゴツとした筋肉質な

身体で男性から可愛いねなんて言われることはまずない『スズキカオル』。なまじ名前が近いだけに、キリリと心が嫉妬に軋む。

「所で、何でアナタ入院しているの？」

私は話題を反らすために聞いてしまった。病院でこういう話題をしない方が良いのは知っている筈なのに、もし笑えない病気だったらそれこそ、この場合は凍り付く可能性もある。

「ああ、耳がね、片方聞こえにくくなってしまってたね。それで耳鼻科に来たら入院ですって言われて、ビックリよね」

よかった、耳ならそんな大変な病気じゃないだろうとホッとする。

「え、耳鼻科で入院なんてことあるの？」

鈴木香織は幼い感じで頷く。

「突発性難聴って分かる？ 歌手の浜崎あゆみさんとかもなったという病気」

そういえば、そんな話を聞いたことがある。彼女はソレで片耳が殆ど聞こえなくなっただとかいう話だったような。

彼女は耳に何かしている様子はなく、何かよく分からない薬品を点滴している。

「そうなの、コレね、一週間一日一袋ノルマなの。それで直ればいいなと思って」

私の視線に気が付いたのか。点滴を指さしてアツケラカンと笑う。

「あ、大きい声で話した方が良い？」

「大丈夫よ、聞こえなくなったのは左の耳なんだけど、これがね、ある音程以上の音が聞こえなくなっただけという状態だから、会話には問題ないの。チョット耳が詰まっているそんな感覚」

彼女はチョット顔をしかめ左の耳を触る。難聴っていうと、音が全体的に聞こえなくなるのかと思っていたけど、そういう形もあるのだと妙な事に感心すらしてしまう。

その病気は点滴をかける以外はあえて治療というものがなく、身体も元気なだけにベッドに寝てられないので、歩き回っているという彼女の話を、私は気楽に聞いていた。どう考えても私の方が重傷だろう。

彼女は耳鼻科の病室が満床なので、内科の方の病室に入れられていて、そこには内科で体調悪くて吐きまくっている患者さんと、眼科のお婆ちゃんと、皆科がバラバラなのとかいった話をするのを、私は静かに聞いていた。

何だろう、彼女のキャラクターなのか、おとなしめの落ち着いた雰囲気なので、会話していても五月蠅くはなくその声も心地よかった。しかも彼女と無邪気に話していると、嫌な出来事とかも忘れ、私は普通の女の子でいれるような気になる。

「薰さんって、ガリーな洋服が好きなのね。でも、もっとクールな洋服の方が似合いそうな気がする」

「え？ 私みたいなのがボーイッシュなの着ると、可笑しくない？」

「いや、ボーイッシュというより、甘くないシャープな感じのヤツというのかな。その方が薰さんの魅力を引き出すような気がする」

二人で女性雑誌に載っている洋服について盛り上がり、他愛ない無邪気な時間を楽しんだ。

そして、彼女の点滴液の残量が終わりそうになるタイミングで、楽しいアフタヌーンティータイムが終わりを告げる。

「私は、午後は此所にいる事多いから、またね」

離れがたい顔をしている彼女に、ついそんな事言ってしまったのは、彼女以上に彼女と過ごした時間が思いの外楽しいものだったから。病院で初めて普通に人間らしい時間を過ごすことが出来た気がする。

私の再会の意思に彼女はホッとしたような顔をして、ニッコリ笑って手を振って去っていった。

気が付くと、陽は傾き景色は暮れの気配を漂わせている。一人になるとなんか、気温が数度下がったようにも感じた。

まだ、夕飯の時間まで二時間もある。病室に戻る気もしないので私はスマートフォンを弄くり、『突発性難聴』についてつい調べてみる。

意外な事に、原因も不明の難病指定の大変な病気なようだ。治療率は約四十%ってあまり高くない数字にも驚いてしまう。とはいえ、片耳が聞こえなくなっただとところで、死ぬわけでもない。それに所詮他人事。私はそれより、部屋に戻らねばならない食事の時間が迫っていることに心を気鬱に染めていた。

無知と傲慢

次の日は、午前中の診察では患部の手術後の確認ということで、その部分のみギブス切り取る事になった。小型電動のこぎりでギブスを切るわけだが、震動が傷に響き痛いし、おまけに刃が足まで切断するのではないかという恐怖は生半可ではなかった。その作業が無事終わった時には精神的にも疲れグツタリしてしまった。先生が傷の消毒をしている時に足の様子を見たが、相変わらず凄い色で、しかも大きな傷がホツチキスのようなもので留まっている。ボルト入りでホツチキス留め……ますます自分の足というか人間の足の話とは思えない。そして切り取ったギブスを再びそこに嵌め、今は元通りの状態に戻っている。

いい加減それだけで疲れたけれど、午後一からリハビリが入る。松葉杖の訓練を再開する。正直まだ痛いし、思いの外ギブスしている足が重くそれを労りながらバランスを取るのが難しい。でもコレをクリアーしないと退院が遅くなるし、退院した後には苦労するのは私だ。しかし足の痛みが激しくなってきたことで、一時間チョットで訓練は終わってしまった。

レストランについたのは、二時半過ぎだった。すると鈴木香織は、昨日と同じ席で、同じように点滴スタンドを連れて座っている。なんか顔色が昨日に増して悪いように感じるのは私だけだろうか？ 一人でいる事もあり、その顔には表情はない。ジツと思い詰めたような表情で、けたたましく騒ぐ赤ちゃんを連れたヤンママ集団のテーブルを見つめている。

あの温厚で朗らかな彼女らしくないその顔に、一瞬声をかけるのを躊躇ってしまった。

「席どうしますか？ いつもの場所で宜しいですか」

どうしたものかと思っていると、ウェイトレスが元気に声をかけてきて、ギョツとしてしまう。

その声で、鈴木香織がコチラに気が付き、手を振ってくる。先程の表情が嘘だったのではないと思うほど、親しみの籠もった彼女らしい笑みに、ちよつとホツとする。私も笑顔で手を振り返す。

「いやゝ今日はリハビリあつて疲れちゃった」

「お疲れさまゝ大変だったね」

今日はアイスコーヒーを注文し、鈴木香織のいるテーブルに車椅子を近づける。私が近づくと慌てて手伝おうとしてくれたが、彼女も点滴スタンドを連れた身、なので私はそれを断り上手くテーブルに車椅子をつけた。こういつてはなんだが、車よりも車椅子の運転が上手くなっている自分を実感する。

私は、今日午前中にあつた電動ノコ切断事件や、リハビリでの顛末を戯けた感じで彼女に話すと、彼女は時には感心したり、驚いたりと私が望む反応を返してくれる。でも何だろうか？ 体調が良くないのか、その青い顔はどこか虚ろに見える。目の下にもクマが出来ている。頬も最初見たときよりも痩けてきた？

「なんか、体調わるいの？ 顔色わるいけど」

彼女は苦笑して首をふる。

「いえ、チヨツト眠れなくて。あと、食欲もなくて」

私は昨日仕入れた、突発性難聴についての情報を思い出す。クスの副作用に食欲減退に胃腸が荒れがあつた。ふと点滴スタンドを見ると、昨日ついていた薬品に加えもう一つ袋が増えている。栄養

剤も追加になったらいい。

「あら、枕が変わるとダメほう？」

「そうじゃないのだけど、私の病室産婦人科が近くて、一日中赤ちゃんの泣き声が聞こえてね」

鈴木香織は顔を苦しそうに歪める。

「なら、こんな所にいるのではなくて、ベッドで寝ていたほうが良くない？」

「あの病室には戻りたくない！」

思いの外キツイ口調で彼女が返ってきて、ちょっとビックリする。思い詰めたようなその目に私は一瞬絶句する。そういえば突発性難聴の原因の一つはストレスとかいうのもあったような。

「ま、私も病室が嫌だから此所にいるので、同じようなものね」

そんな私の言葉に、彼女は泣きそうな顔で笑う。彼女の病室にも私ほどではないにしても、嫌な事があるのだらう。でも、最初に感じた以上に鈴木香織という女性が繊細で脆い存在に思えた。

強く私がその肩とか持ったら、崩れて壊れてしまいそうだ。私は馬鹿な考えを振り払うように視線をそらす、彼女の後ろにある鏡にレストランの光景が映し出されている。華奢な鈴木香織の後ろ姿にその前にいる、片目の周りが青やら黄色やらと、凄い事になっている私の顔、そして後ろで騒ぐヤンママの集団の様子。

しかし、私の後ろにいる、ヤンママ集団が先程から五月蠅い。何でもその音量で話す必要がるのだらうか？ 時々周りをビビらせるの

が目的かというくらい、さらに声のトーンを上げてきてイライラさせている。赤ちゃんは乳母車にいたり腕に抱いたりしているが、二・三歳の子供は先程から放置状態で走り回っていて危なくて堪らない。

最初会ったときに、鈴木香織が不快そうに見ていたのも頷ける。

「しかし、五月蠅いよね、あの集団」

「ずっとあんな感じ」

鈴木香織は、大きくため息をつく。彼女の瞳に何か陰悪で暗いモノが宿るのを感じる。

「なんかさ、当たり前前を当たり前前に過ごしている人って、傲慢で残酷だよ」

そして私に話しかけるといつかつぶやくような彼女の言葉に、私は一瞬ついていけなかった。

「ん？ どういうこと？」

聞き返した言葉を彼女は聞いてなかったようだ。鈴木香織は驚いたように目を見開き、立ち上がり走りだす。彼女の腕に繋がった点滴スタンドが付いていきず、激しい音をたて倒れ、ブチっといやな音がしてチューブが腕から外れる音がする。

鈴木香織は、私の一メートル程左にある食事を運ぶ用のワゴンの方へと走る。三歳くらいの子供がワゴンの側にいる。客の方を向いていてウェイトレスはその子供に気が付いていない。子供は考えなしに料理の載っているワゴンに飛びつきぶら下がっている為にワゴンが傾いている。子供にむかって食品ごと倒れてきているのを、鈴

木香織は子供の手を引つ張りたぐり寄せ抱きしめて、そのままかばう。

レストランに激しい破壊音が響きわたり辺りは騒然とする。

鈴木香織の背中にスパゲッティーの皿がぶつかりそのまま落ちた。子供は鈴木香織のお陰で怪我はなかったものの、その激しい音に驚き彼女の腕の中で火がついたように泣き出す。

「あゝあ、何やってるの、アンタ、馬鹿ね」

その子供の母親と思われるヤンママの一人は、場違いなノンビリした呆れた口調で近づいてきた。馬鹿というのは、鈴木香織に対してではなく、子供に言ったようだが、鈴木香織はその言葉にキツとその母親を睨み付ける。

「……貴女最低な、母親ね！」

鈴木香織が発する言葉は、ビックリするほど冷たく怒りに満ちていた。瞳が異様にギラギラとしている。口の端が上がって一見笑っているようにも見えるが、激し過ぎる怒りが彼女をそのような表情にしているのだろう。

「なっ、他人にそんな事言われたくないわよ」

私だったら、こんな表情で言われたら、多分黙ってしまうと思うのに。意外な事に相手は反論してきた。反論する前に、もっと謝罪とか感謝とかすべき事あると思うのに、そういう常識はないようだ。

「子供の面倒も満足に見られず、子供が危険な目にあっても気付かず助けも出来ない、母親失格以外何者でもないじゃない！」

流石に右腕から血を流し、息も荒く鬼のような形相で怒っている相手に、母親もびびってきたようだ。自分の子供を自分の元に引き寄せ、仲間の元に戻りさっさと逃げるようにレストランから出て行ってしまう。

私も車椅子を動かし彼女に近づこうと思ったけど、近づくのにチョット躊躇ってしまうような怖さが今の彼女にあった。

「お客様大丈夫ですか？」

レストランのウェイトレスは慌てて、鈴木香織の背中から？を落とし、濡れ布巾で背中を拭く。食事していた看護婦も近づいてきて点滴スタンドを元に戻し針のついたコードを纏めてから近づいてくる。

「貴女何処の病棟？　まず着替えて、点滴を付け直しましょうね」

やさしい看護婦の言葉に、彼女の表情が少し緩むが、逆に迷子の子供のような脅えた表情になる。

「いやだ、戻りたくない」

幼い感じに首をふり、そうつぶやき、私の方を縋るように見る。

そして電池が切れたように倒れてしまった。

私は、その看護婦に彼女の名前と所属している科を伝える。看護婦さんは頷きながら鈴木香織の腕にまかれた入院患者用のリストバンドを見てから、PHSでどこかに電話かける。

そして、やってきたストレッチャーに乗せられ、彼女はどこかに連れていかれてしまう。

私はその様子を、ただ呆然と見守る事しかできなかった。

欠けている二人

取り残された私は、どうしてよいのか分からず、取りあえず二人分の会計をすませ、すぐに彼女が入院しているはずの内科病室のあるエリアへと向かう。その階に降りると、鈴木香織が言っていたように元気な赤ちゃんの泣き声が響いている。

ナースセンター受付にいくと、やや怪訝な表情されたけど事情を話すと納得してくれて一つの病室を教えてくれた。

礼を言っただけで離れようとしたら、丸顔の看護婦さんが戸惑ったように私に問いかけてくる。

「あの、鈴木さんといつも、レストランで会われているのですよね？」

私と彼女との組み合わせがそんなに妙に思えたのだろうか？

「はい」

看護婦さんは、おずおずとした様子でさらに聞いてくる。

「そこで、鈴木さんどんな感じでした？　そこで何か口にされていた？」

「は？」

思ってもいない事を聞かれ、私は間抜けな声をあげてしまった。

「いえ。鈴木さん病室で食事殆ど手につけられないのですよ。今日、貧血で倒れたのも、その所為かと……」

私は昨日、今日の彼女の様子を思い出す。彼女は紅茶とか飲み物は飲んでいただけで、何かを食べていた事はない。

今日の支払いも、紅茶とオレンジジュースだけ。私はその旨を伝えると、看護婦さんは大きくため息をつく。心底、患者さんを心配している様子だけど、私は何もそれ以上の情報を与えることができなかった。

拒食症？ いや、入院する前の日、ホットケーキが彼女のテーブルに確か載っていたし、食べていた。入院してから食べられなくなっているという事だ。

私はもう一度看護婦さんにお辞儀してから、激しい赤ちゃんの泣き声をBGMに病室に向かう。

ドアは開いていたので、取りあえず挨拶だけして入ると、手前のベッドに鈴木香織が寝ているのが見えた。手術の前の人が着る簡易寝間着に着替えさせられ、点滴チューブが先程と反対側の手につけられていた。顔色が『白い』を通り越して『青い』。

「香織ちゃん？」

恐る恐る話しかけると、鈴木香織はゆっくりと目を開けコチラを見てフワッと笑う。

「ごめんね、みつともない所みせて」

元の穏やかな彼女に戻っている。私はニッコリ彼女に笑い返す。

「いやいや、あの母親にはキレて当然よ！ しかも謝りもしないなんて信じられない。それより背中大丈夫火傷してない？」

彼女は『ん』と考えてからニツコリ笑う。

「ヒリヒリもしてないから、大丈夫みたい」

フード付きの上着と彼女の長い髪が、熱さから守ってくれたのだろ。

「良かった」

私はホツと胸をなでおろす。

「ダメだね、私、あのお母さんに八つ当たりしちゃって」

彼女はゆつくりと上半身を起こす。

「え？」

あれは怒って当然だし、あの母親が百パーセント悪い。確かに怒り方はやや尋常でなかったものの、鈴木香織が悪いとは思わない。

「私達夫婦ね、もう結婚して五年なんだけど子供できないの」

彼女らしくない苦い表情を浮かべて、そんな話を話し出す。

「二年経った頃から、お姑さんを初め親戚が騒ぎ出して、通院したり漢方してみたりと色々試していて、もう何がなんだか分からなくなってしまうって」

その言葉で彼女が何で、私に親しげに話しかけてきたのか分かってきた。

「自分が本当に、子供を欲しいのか、愛の為なのか生殖の為なのかセックスの意味も分からなくなってきた」

彼女は独り言のような感じで言葉を続けていく。先程一回キレたことで、心の扉の鍵が外れてしまったのだろう。心の奥に仕舞われていた筈の彼女の懊悩の感情がこぼれるように外へと流れ出す。

「お医者さんに、『排卵していますから今夜頑張ってください』なんて言われ続ける事も堪らなくて」

鈴木香織が私に対して感じているであろう感情に対する不快感と同時に私は完璧な女の幸せを味わっていると思っていた鈴木香織でも、こんな風に苦しみ悩んでいるという事実に対してどうしようもない暗い喜びを覚えていた。

相反する感情に翻弄されながら、彼女の口からただただ流れてくる言葉をじっと聞いていた。彼女の言葉を聞きながら、怒りを帯びた不快感と、歪んだ歓喜の感情の間で、チクタクチクタクとメトロノームのように感情の針が揺れ動く。どちらにしても、どうす黒い私の醜い感情。

「で、貴方は、私が貴女以上のどうしようもない不幸を抱えているから、優越感を楽しむ為に近づいてきたの？ それとも同情？」

鈴木香織の言葉が終わったときに、感情の針が止まったのは不快の方だった。しかし彼女はビックリしたような顔をして顔をブルブルと横に振った。

「違う！ 薫さんみたいに強くなりたかった」

強い？ どこが？ どうしようもない苛立ちを抱え、世の中にいる女性みんなを憧れながらも嫉妬に狂っている私の何処が強い？ そう、さっきのレストランでも、あの当たり前のように無邪気に女の幸せを謳歌するヤンママ集団にも、鈴木香織以上の苛立ちと嫉妬を感じていた。そして、ああいった無邪気に私を傷つけていく人間達以上に、こんな醜い自分自身が嫌で堪らない。いくらお洒落して化粧して綺麗に見せても、こんな醜い私を誰が愛してくれるのだろうか？

「は？」

私は聞いていられないと、車椅子を動かそうとするが、彼女が手を伸ばして私の手を掴んでくる。

「薫さんは覚えてないかもしれないけど。レストランで会う前に私、見ていたの。貴女の事」

あまりにも必死な様子と鈴木香織の言葉に私が動くのを止める。それに彼女が私を掴んでいるのは、先程血を流していた方の手だ。むやみに振り払えない。

「え？」

「あの日の午前中。耳鼻科で待っていた私の横を貴女が通り過ぎたの」

どうしもうもない苛立ちを抱えながらあの日は、診察室に向かっていた。でも彼女の記憶に残ることをした覚えはない。でも私の存在そのものは、インパクトあったかもしれない。G I Dの診断は受けているものの、今はカウンセリングのみでその先に進む治療は続

けていない。その後のホルモン剤治療や性別適合手術や戸籍変更手続きやそれなりの費用がかかるので今それを必死で貯めて稼いでいるところだ。忌々しいことに、その半分以上は元彼に貢いでしまったから、また頑張らないとダメだけど。

またせめて両親には理解もらいたいという想いが残っているだけに、踏ん切りがついていない。二十歳を超えたから保護者の許可なくとも大丈夫なのだが、せめて親だけは娘と認めてもらいたい。

つまり、今の私は人から見たら、単なる女装している男性でしかない。そんな人間が派手な怪我をして通り過ぎたのだから。目立つだろう。

「そしたら、品のない中年男性が貴女に酷い事を言つて」

ああ、あの件かと、思い出した。

車椅子を動かして診察室に向かっていると、禿げていて好色で下劣で頭も悪そうな親爺が、私の方を見てニヤニヤ近づいてきた。

『なんだ、ゴツイ姉ちゃんと思つたら、オカマかゝあんたチンチンまだ付いているのかよ？』

態と大きな声で、冷やかしてきた。私は羞恥と怒りで視界がボワと揺れた気がした。もし足がこんなのでなければ、立ち上がってソイツを殴ってやりたかった。性同一性障害が一般で理解されていないのは分かっている。家族ですら、それが難しい状況。理解というのはそれだけ難しいものだから、それは仕方ない。一番堪らないのはこういう、理解もせず面白可笑しく茶化してくる輩である。

『アンタのチンケなモノより立派なのがね！ オッサン！』

私は態と相手を思いつきり蔑んだ顔で見ながら、ドスを効かせてそう言っただけだ。

「私はあの光景みて、爽快だったの。薫さん格好良かった！」

ウツトリとした表情で話す鈴木香織を複雑な気持ちで見つめる。

あれの何処が格好よかった？ かかなくて良い恥をかいただけだ。相手のオッサンの口ごもった悔しそうな顔が見られた事だけが唯一スッキリした所。

でも彼女の目をみると、私を蔑んだ目とか同情の目とかではなく、素直に愛敬の意志で見つめているのは分かった。彼女の方が年上なのに、私の方がお姉さんみたいだ。インプリンティング 刻印づけみたいなもので、不安やストレスを溜め込み鬱いでいた彼女には、あの時の私はよほど頼りがいのある者に映ったのだろ。そんな無邪気な瞳に見つめられているうちに怒りや不快感は、消えていった。

「私はさ、電話の度に子供がまだかと言ってくるお姑さんとかに、あんな風に言い返せばどんなに爽快だったか『そんなに子供が欲しいければ、義母さんが産んで！』とかね」

「言っただけじゃいいじゃん」

悪意はなくても、人の言葉は確実に人を傷つけ痛めつける。彼女はズット、無邪気な言葉に傷つけられボロボロになっていった。そういう人には、気付かせない限り分からない。鈴木香織は、苦笑して首を振る。

「薫さんといったら、私も強くなれる気がしたの」

今度は私が苦笑して首を振る。

「私は強くないよ、結局親に拒絶反応示されたら、怖くて逃げて。今も楽な方、楽な方に行っている」

「でも、薫さん颯爽としていて格好良いよ！」

「『格好良い』か……出来たら『可愛い』とか、『綺麗』とか言うて欲しいけどね」

『格好良い』と言われるのも久しぶりだ。高校まで男の格好していたときは、結構言われていた。女の子受けする顔らしくて意外にもてた。それに女性に性的な興味なんてなかっただけに、それが今流行の草食系男子にも見えたのだろう。告白もよくされて、彼女も何人かいた。とはいえ、私は男として彼女達を愛せない、どの恋愛もすぐに終わってしまったけど。私にとっては複雑な武勇伝。

「可愛いは言い難いかしら。綺麗の方がシツクリくる」

鈴木香織はフッフと笑う。彼女が居心地良いのは、私が男とか女とかではなく鈴木薫である私を受け入れてくれているからだ、今分かる。

男の身体をもって生まれてきたために女と世間で認めてもらえない私と、子供を産まないからと相手の家族や親戚から一人前扱いされない鈴木香織。女でありながら女という部分を社会から否定されている。

どちらも世間からみたら『欠けている』二人。

『欠けてない人』には見えない世界に、私達はある。

「綺麗か、この痣がなければね」

「そうだね、化粧したら華やかさ増して素敵なんだろうね。楽しみ」

子供みたいな無邪気な顔で笑う。良い意味で子供なんだ。無垢な上、か弱い存在。

「今日は、もう寝たほうがいいよ、疲れたでしょ？ あとご飯ちゃんと食べるんだよ、なんか細くなってきたんじゃない」

鈴木香織はチョット困った顔をするが、頷く。

私は携帯アドレスを交換して、部屋を後にした。そして、まっすぐナースセンターの所に行く。

「あの、鈴木香織さん、他の階の病室に移動できませんか？」

先程会話した丸顔の看護婦さんに頭を下げて話を切り出す。

キョトンとした顔をしたけれど、看護婦さんは真剣な顔をする。

「鈴木さん何かおっしゃったのですか？ 病室で困った問題が起きているとか」

私は首をふる。病院や病室に対する不満は一切言っていない。

「不妊治療で悩み苦しみ続けて突発性難聴になった女性を、産婦人科の側の病室は酷です。私のような性同一性障害の人間を戸籍の性別だけで男性部屋に入れるのと同じくらいね」

看護婦さんはハツとした顔になる。優しい良い看護婦さんなんだろう。でもカルテの上でしか患者を見ていない。まあ患者自身がの隠している心の奥を、察するというのも難しい話でもある。

「私の件はいいです。女性部屋に今の私を入れるのも難しい所があるのは分かっていますから。それに慣れていきます。でも彼女の方だけでも何とかしてやってください。あの状況だと治るものも治らなくなります」

私は頭を下げて、内科エリアを後にした。そして、あの男臭くやかましい外科にある私の病室に帰る。部屋でいつものようにカーテンを締め切り、病院の味気ないご飯を食べていると、メールがきた。鈴木香織からだ。

『なんかね、病室移動になるみたい！ 外科病棟って、もしかして同じかな？ 6-Cエリアだって』

私はそのメールみてホツとする。

『そうなんだ、私も6-Cエリア、でも流石に同じ部屋にはならないかな』

『そっか、同じ部屋じゃないのは残念だけど、ご近所付き合いになるのは嬉しいな』

なんか、最悪な入院生活も少しは楽しくなってきたかもしれない。私は珍しく病室でニコニコ笑っていた。薄いカーテンの向こうにはウザイ世間があるけれど、今このカーテンで仕切られた中の世界は、昨日よりも遥かに心地良い世界に変わっている。私達は、消灯の時間まで、メールでガールズトークを楽しんだ。

欠けている二人（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。

薫と香織の物語『ピースが足りない』という続きの物語があります。
また薫の高校時代の物語を『アダブティッドチャイルドは荒野も目指す』を連載中です。

ご興味をもってくださいました方はそちらをどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6327p/>

欠けている

2011年11月15日14時09分発行